

5 まとめ・考察

(1) 釧路湿原流域圏における学校での環境教育の実施状況

本調査により、小学校及び中学校における環境教育の取り組みは、各学校によって実施内容にばらつきは見られるものの、総合的な学習の時間を中心として各教科と関連させながら、ほとんどの学校において実施されていることがわかりました(図43)。また、高等学校、大学等においては、主に各教科や講義の中で環境教育を実施していることがわかります。

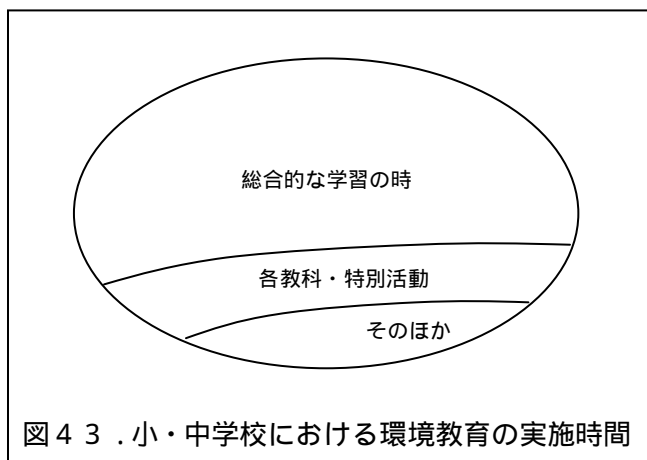


図43. 小・中学校における環境教育の実施時間

「環境教育を実施している」と回答した学校の一部は釧路湿原を環境教育の題材として選択しており、その中には体験からの気づきの促進、課題発見、課題解決へ向けた実践といったステップを踏み、体系的な取り組みを行っている学校もわかりました。

環境教育で取り扱う題材としては、小・中学校においては、身近な環境を大きなテーマとし、生活圏の自然環境や社会環境を題材として環境教育に取り組む学校が多くの割合を占めていることが設問2-4への回答よりわかりました(図44)。高等学校や大学等においては、対象とする地域の範囲や専門性に差があるものの、同様に地域の環境を主な対象としていることがわかります。

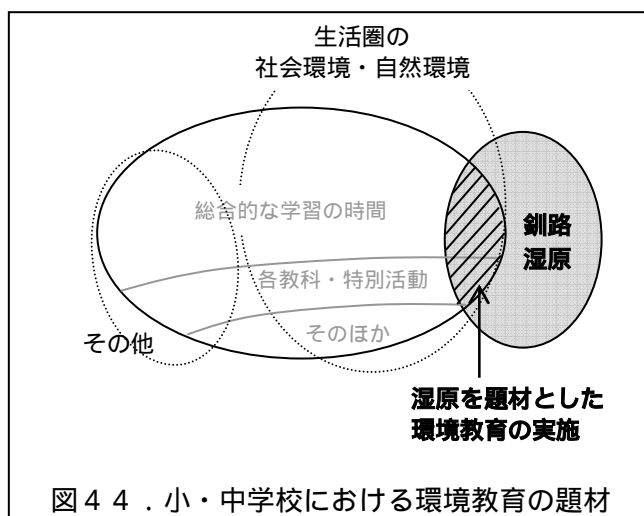


図44. 小・中学校における環境教育の題材

(2) 環境教育の導入にあたっての制約要因

環境教育の視点から教育活動を実施するうえで、多くの学校が、校外における体験学習や調べ学習を前提として授業を実施しており、実施に際しては、「児童の移動」に係る時間・経費・安全性等が制約要因や課題として多く挙げられています(図45:制約要因1)。また、学習効果を高めるにあたって、児童の発達段階に適した題材の選択という視点から、児童にとって身近な環境である「生活圏」における社会環境や自然環境に適した題材として多くの学校が扱っていること、指導に係るノウハウ・情報や手間なども題材選択の要因の1つとなっていることが設問2-6、2-7よりわかりました。

このほか、環境教育や湿原を題材とした教育活動の実施においては、他教科との学習内容の調整や時間数の確保などが、実施に際しての制約要因や課題として多く挙げられています(図45:制約要因2)。

設問 3-5 より、「釧路湿原を題材とした教育活動を実施していない学校」においては、上記視点を踏まえて、他の適した題材を選択しており、「釧路湿原を題材として選択している学校」については、身近な自然環境として、若しくは社会環境も含めた視点から釧路湿原を環境教育に適した題材として選択している学校であるとともに、移動や時間数確保などの課題整理を行いながら実施している学校であると考えられます。

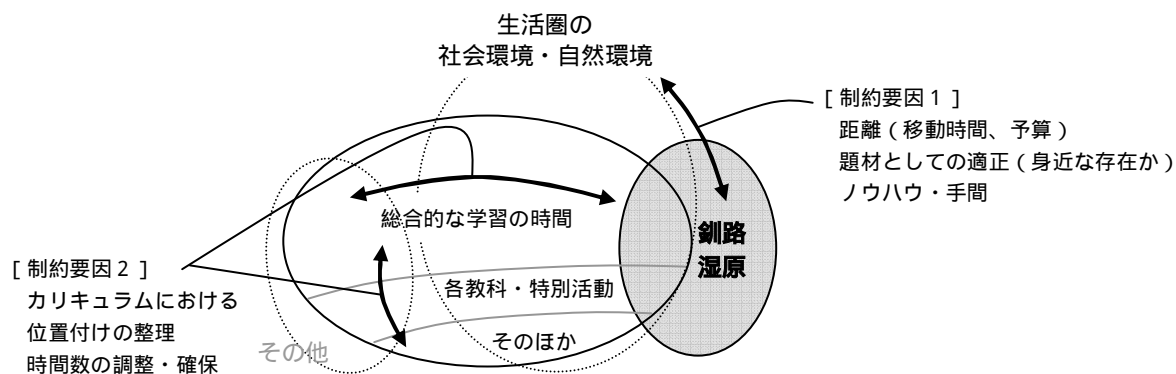


図 4 5 . 環境教育の実施に係る制約や課題

(3) 湿原を題材とした環境教育の推進方策の検討に向けて

湿原を題材とした教育活動や環境教育の実施に伴い、課題や制約要因の改善に向けて考えられる事項を以下に考察します。

学校のニーズに応じた支援の必要性

前提として、様々な制約の中で教育活動を実施している学校のニーズに合った支援方策を検討していく必要があります。例えば、総合的な学習の時間を含めて、各教科や特別活動などの中で既に学校が取り組んでいるカリキュラムに合わせて活用いただくことが可能な多用な授業例の情報を蓄積・発信していくとともに、学校とコミュニケーションを図りながらフォローアップや様々な団体や機関とのコーディネートを行っていくことで、導入段階におけるノウハウや手間の削減につながると考えられます。

現在のカリキュラム内での活用機会の増加に向けて

現在、各学校で取り組まれている題材の中で、釧路湿原に触れていただく機会をどのように増やしていくかを検討していく必要があります。例えば、まとめや発展などの段階で、釧路湿原の話題を一部取り上げて活用いただき、学習効果を高める授業の形を提案・実施支援していくことで、様々な題材を入り口とした多様なプログラムの中で、釧路湿原に触れていただく機会を広げていくことにつながると考えられます。このためには、身近な自然環境若しくは社会環境から釧路湿原につなげていく具体的なアプローチの例を提示していくことが必要です。

既に各学校が扱っているフィールドの活用を前提としたプログラムを波及させていくことが可能であれば、移動時間や予算の制約によらず、釧路湿原を地域の題材の一つとして活用いただくき

けづくりになると考えられます。

様々な団体等と連携した取組の促進

カリキュラムの中で釧路湿原を訪問するには、上記に加え、移動手段（経費）の課題を解決する必要があります。

学校が独自に予算を工面することが困難であれば、各種助成金等の活用や関係行政機関や団体、地域の企業や大学等からの支援や連携の可能性を検討していく必要があります。

環境教育の題材としての湿原の価値を高める

学習指導要領や環境教育指導資料等で示されている内容と照らし合わせ、素材としての釧路湿原を（環境）教育的な価値を持つ素材として高めていく必要があります。例えば、湿原での体験学習から生まれた児童の疑問や気づきを各教科で扱っていく、若しくは各教科で学習した内容を確認するという視点から湿原での体験学習を行う等、各教科との関連性や学習のプロセスを整理し、情報を発信していくことが必要です。現在のカリキュラムと競合する形で釧路湿原を題材とした学習をどのように活用いただくかを検討するのではなく、指導要領等で示されている教育を実施していくために適した題材の1つとして釧路湿原の教育的な価値を高めていくことで、図45で示した「制約要因2 カリキュラムにおける位置付けの整理、時間数の調整・確保」の課題解決につなげていくことが可能と考えられます。